

2025 年度 調査研究活動報告書

広島修道大学ひろしま未来協創センター長 殿

研究(代表)者所属 : 人文学部

研究(代表)者名 : 中根光敏

当該研究期間	2025 年 4 月 1 日から 2026 年 3 月 31 日までの 1 年間分		提出年月日 2026 年 3 月 2 日	
研究課題	【ひろみら領域研究】 グローバル化による社会変容 - COVID-19 Pandemic を基軸として			
研 究 組 織	研究代表者及び研究分担者		役 割 分 担	
	氏 名	学部・職名		
	(研究代表者) 中根光敏	人文学部・教授	統括 消費社会・コーヒー文化・労働問題	
	(研究分担者) 田中慶子 仁井田典子 (代表者・分担者計 3 名)	人文学部・教授 人文学部・准教授	感情労働、接客労働、消費 社会問題、労働問題、ジェンダー問題	
今 年 度 の 研 究 成 果 要 旨	※要旨の文字数は 600～800 字程度でお願いします。 2025 年 8 月～9 月及び 2026 年 2 月に博多・ソウル (安山市を含む) におけるフィールド調査を実施した。韓国・安山市は、ソウル中心から公共交通機関で 1 時間あまりの工場都市であるが、工場労働者世帯が生活している「地域・生活運動が労働運動へと繋がっていった」という歴史的経緯があり、地域・生活運動に根ざしていることから女性たちが中心となって労働運動が行われてきた。この安山市の社会運動の特徴を日本の労働運動と比較して分析していきたいと考えている。2026 年 2 月の調査では、安山市においてかつて中国人居住区であった地域がエスニックタウン化しており、移住労働者と安山市の社会運動との関連を明らかにしていくという新たな課題が浮かび上がった。ソウルにおいては、COVID-19 Pandemic 以降もカフェブームが続いているけれども、カフェブームを象徴する場所や流行の内容に大きな変化が確認できた。取り分けても COVID-19pandemic 前に若年層を中心とした繁華街を象徴した、狎鷗亭やカロスキルは商業地としての衰頹が激しく、靴製造を中心とした工場地帯でマニアックなカフェが現れていた聖水洞は、カフェだけでなく最先端の商業地として高級ブランド店などが集中し、全く別の街となっていた。2025 年 10 月～11 月にインドネシア・スマトラ島において消費・コーヒー文化に関するフィールド調査を実施し、スマトラ島調査に合わせてトランジットを使ってシンガポール・チャンギ空港において消費文化に関するフィールド調査を実施した。北スマトラ島州都メダンでは高層マンションに大型の高級ショッピングが付随したビル街が新しく作られ、多くの新しい高級カフェが目立つようになってきた一方で、生活者間の格差が開いていた。コーヒー生産地アチェ州ガヨ地区は、自治州のコーヒーツーリズム政策の効果が顕在化し、インドネシア国内からの観光客が増加し、ガヨ地区タケンゴンでは新しいホテル飲食店などが新しく建設されるなど、大きく変貌していた。2026 年度に引き続き調査を行うことで、グローバル化による社会変容を明らかにするために有効なフィールド調査が実施出来たと考えている。			
成 果 発 表 予 定	発 表 論 文 題 目	グローバル化による社会変容 (仮題)		
	発表誌名 発表学会名	発行所 学会名	発表時期	備 考
	グローバル化による社会変容 (仮題)	出版社 (未定)	2028 年 10 月	予定
※研究期間が 1 年未満の場合、本用紙を調査研究完了報告書と兼ねることができます。 (成果発表報告時 研究代表者使用欄) ※規程に則り、調査研究費による成果発表であること及び交付年度を明記すること ☐ 上記の通り成果発表を 行う ・ 行った (ひろしま未来協創センター使用欄) ☐ 成果発表資料を受け取った。(年 月 日)				

2025 年度 調査研究活動報告書

広島修道大学ひろしま未来協創センター長 殿

研究(代表)者所属：人間環境学部

研究(代表)者名：長谷川 尚弘

下記のとおり今年度の調査研究費による調査研究が終了しましたので、ここに報告いたします。

当該研究期間	2025 年 4 月 1 日から 2026 年 3 月 31 日までの 1 年間分		提出年月日	2026 年 3 月 10 日	
研究課題	【ひろみら領域研究】←非該当を削除すること 脊椎動物における骨形成遺伝子の進化的起源の解明：尾索動物を用いたトランスクリプトーム解析によるアプローチ				
研究組織	研究代表者及び研究分担者		役 割 分 担		
	氏 名	学部・職名			
	(研究代表者) 長谷川 尚弘	人間環境学部・助教	研究代表者として材料の採集、RNA 抽出、系統解析、論文の執筆の過程を主体的に行う。		
	(研究分担者) 鈴木 智也	人間環境学部・助教	核酸抽出と系統解析について研究代表者と共同して行う。		
	柁原 宏	北海道大学理学研究院・教授	ホヤ類の採集・同定、論文の共同執筆を行う。		
織	(代表者・分担者計 3 名)				
今年度の研究成果要旨	※要旨の文字数は 600～800 字程度でお願いします。 本年度は、当初計画に基づき沖縄県において野外採集を実施し、ウスボヤ類およびベニボヤ類を含む計 74 サンプルを得た。現在はこれらの同定作業を進めるとともに、次年度に予定していた核酸抽出およびトランスクリプトーム解析の一部を前倒しして実施している。その結果、4 サンプルについて de novo トランスクリプトーム配列を決定することができ、骨片形成に関与する遺伝子群の解析に向けた基盤データを整備することができた。一方で、骨片をもつホヤ類であるウスボヤ類の一種チャツボボヤおよびベニボヤ類の一種オニベニボヤについては、シーケンス解析に十分な品質の核酸を得ることができなかったため、現在は保存条件や抽出方法の検討を進めている。今後は抽出条件を改良し、再度核酸抽出を試みる予定である。また、手元にある複数のホヤ類トランスクリプトーム配列データを用いてマボヤ目の分子系統学的解析を進めており、その成果をまとめた論文を 2025 年 10 月に国際誌 <i>Molecular Biology and Evolution</i> に投稿した。本論文は査読の結果掲載には至らなかったが、現在は指摘事項を踏まえて原稿を改訂しており、2026 年度中に国際誌 <i>iScience</i> への再投稿を予定している。さらに、今回の調査では未記載種（いわゆる新種）と考えられるホヤのサンプルも得られており、分類学的な成果につながる可能性も見えてきている。これらの成果は、骨片形成に関与する遺伝子群の同定に向けた比較解析の材料としても重要であり、本研究の次段階となる機能解析に向けた基盤資料として活用される見込みである。				
成果発表予定	発表論文題目				
	発表誌名 発表学会名	発行所 学会名	発表時期	備考	
	<記入例> 広島修大論集－人文編－第 00 巻 00 号	<記入例> 広島修道大学人文学会	年 月	pp.00－00	
※研究期間が 1 年未満の場合、本用紙を調査研究完了報告書と兼ねることができます。 (成果発表報告時 研究代表者使用欄) ※規程に則り、調査研究費による成果発表であること及び交付年度を明記すること ☐ 上記の通り成果発表を 行う ・ 行った (ひろしま未来協創センター使用欄) ☐ 成果発表資料を受け取った。(年 月 日)					

2025 年度 調査研究活動報告書

広島修道大学ひろしま未来協創センター長 殿

研究(代表)者所属 : 人文学部

研究(代表)者名 : 阪上 辰也

下記のとおり今年度の調査研究費による調査研究が終了しましたので、ここに報告いたします。

当該研究期間	2025 年 4 月 1 日から 2026 年 3 月 31 日までの 1 年間分		提出年月日 2026 年 3 月 11 日	
研究課題	【ひろみら領域研究】 学習管理システムを用いた大学生による英語の語彙学習状況にかかわる基礎的研究			
研 究 組 織	研究代表者及び研究分担者		役 割 分 担	
	氏 名	学部・職名		
	(研究代表者) 阪上 辰也	人文学部・教授	研究の総括 (文献調査, データ収集と解析, 研究成果の公表)	
	(研究分担者) な し			
(代表者・分担者計 1 名)				
今 年 度 の 研 究 成 果 要 旨	※要旨の文字数は 600～800 字程度でお願いします。 2025 年度においては、前年度に実施した学習管理システム (Moodle) を用いた語彙理解度テストのデータを拡張し、学習者の語彙学習行動と学習成果の関係について、ログデータ分析を用いた検討を行った。対象は学部 1 年生を中心とする英語科目受講者であり、英文読解に必要な基本語彙 1200 語について、前後期を通じて毎週 50 語の理解度テストを 24 回実施した。また、学習支援として、学習範囲内から 20 語を出題する模擬テスト形式の練習問題を Moodle 上で提供し、学習者は任意に受験できる形とした。 本年度は、前年度の分析に加え、新たに蓄積されたログデータ (受験回数, 受験時刻, 解答時間, 各テストのスコアなど) を用い、学習行動の特徴をより詳細に把握することを目的として分析を行った。具体的には、練習問題におけるスコアと時系列での変化を捉えて、練習問題への取組状況と語彙理解度テストの成績との関係を検討した。分析の結果、練習問題において 20 点満点近くのスコアを記録する学習者は、理解度テストのスコアも高い傾向が確認された。また、学習期間を通して継続的に練習問題へ取り組む学習者は、理解度テストの成績も高い状態で推移することが確認された。一方で、練習問題のスコアが低い学習者は、理解度テストにおいてもスコアが低調となる傾向も観察された。 これらの結果は、関連する研究において従来から指摘されているように、語彙学習における反復的な練習と継続的な学習行動が高いパフォーマンスを発揮するのには重要であることを裏づけるものとなっている。本研究成果の一部については、コンピューター支援言語学習にかかわる国際学会 EuroCALL において発表を行い、学習ログデータの教育的活用の可能性について議論を行った。語彙項目ごとの難易度や学習者の英語能力指標 (TOEIC スコア等) との関係も含め、語彙習得のための学習過程の個人差の分析へと発展させたい。			
成 果 発 表 予 定	発 表 論 文 題 目	LMS のログデータを用いた語彙テストにおける事前学習の効果検証 (仮題)		
	発表誌名 発表学会名	発行所 学会名	発表時期	備 考
	広島修大論集 第 67 巻 1 号	広島修道大学人ひろしま未来協創センター	2026 年 9 月	(ページ数未定)
※研究期間が 1 年未満の場合、本用紙を調査研究完了報告書と兼ねることができます。 (成果発表報告時 研究代表者使用欄) ※規程に則り、調査研究費による成果発表であること及び交付年度を明記すること ☐ 上記の通り成果発表を 行う ・ 行った (ひろしま未来協創センター使用欄) ☐ 成果発表資料を受け取った。(年 月 日)				

2025 年度 調査研究活動報告書

広島修道大学ひろしま未来協創センター長 殿

研究(代表)者所属 : 人間環境学部

研究(代表)者名 : 川村 邦男

下記のとおり今年度の調査研究費による調査研究が終了しましたので、ここに報告いたします。

当該研究期間	2025 年 4 月 1 日から 2026 年 3 月 31 日までの 1 年間分		提出年月日 2026 年 3 月 2 日	
研究課題	【ひろみら領域研究】 高温高压化学反応の研究ツールの構築と人工リボザイムの機能解析			
研 究 組 織	研究代表者及び研究分担者		役 割 分 担	
	氏 名	学部・職名		
	(研究代表者) 川村 邦男	人間環境学部・教授	研究代表者(研究ツールの構築および人工リボザイムの機能解析)	
	(研究分担者)	学部・		
(代表者・分担者計 1 名)				
今 年 度 の 研 究 成 果 要 旨	※要旨の文字数は 600~800 字程度でお願いします。 申請者は、生命起源の研究のため世界に先駆けて超高压下で化学反応を追跡するための方法を開発し、アボカド ウイロイド由来リボザイム (ASBVd:HHR) の自己開裂特性を高压下 (30 MPa) で解析した。本研究ではこの手法を改良し、深海 10000 m に相当する圧力下 (100 MPa) の反応を解析する装置を確立するとともに、ASBVd:HHR と共通のコア配列をもつリボザイム候補の自己開裂反応を解析する。昨年度は装置作成をおおむね完了し、リボザイムをスクリーニングし ASBVd45 および ASBVd45-3G5 の反応の温度依存性を解析した。 本年度は、①リボザイム候補として ASBVd45 の 3'-および 5'-末端に 2 本のアンカーを持つ AnchorRibo-1 および AnchorRibo-2 の自己開裂能を測定し、自己開裂することをおおむね確認できた。②これらに対する鉱物の効果を、45~55℃の範囲で検討した。鉱物として、44 億年前に水が存在したことの根拠として用いられるジルコンを用いた。また、AnchorRibo-1 および AnchorRibo-2 の配列は、リボザイムのコア部分が保持されることを 2 次元構造から推定した。予備研究では、ASBVd45 は鉱物によって自己開裂反応が阻害されることが観察された。一方、鉱物存在下では自己開裂反応が阻害されることがおおむね確認された。これは、鉱物の吸着によって開裂部分が影響を受けるためであると考えられる。一方、AnchorRibo-1 では反応により原料が減少し自己開裂反応が起こることが示唆され、解析を進めている。			
成 果 発 表 予 定	発 表 論 文 題 目	The recovery from inhibitory with mineral surface of ribozymes by attachment of anchors levitating the ribozyme core structure (構想中)		
	発表誌名 発表学会名	発行所 学会名	発表時期	備 考
	<記入例> 広島修大論集-人文編-第 00 巻 00 号 人間環境学研究、Life (MDPI), Discover Life (Springer) など	<記入例> 広島修道大学人文学会 広島修道大学ほか	年 月 2027 年 3 月	pp.00-00
※研究期間が 1 年未満の場合、本用紙を調査研究完了報告書と兼ねることができます。 (成果発表報告時 研究代表者使用欄) ※規程に則り、調査研究費による成果発表であること及び交付年度を明記すること ☐ 上記の通り成果発表を 行う ・ 行った (ひろしま未来協創センター使用欄) ☐ 成果発表資料を受け取った。(年 月 日)				

2025 年度 調査研究活動報告書

広島修道大学ひろしま未来協創センター長 殿

研究(代表)者所属 : 商学部
研究(代表)者名 : 政岡 孝宏

下記のとおり今年度の調査研究費による調査研究が終了しましたので、ここに報告いたします。

当該研究期間	2025 年 4 月 1 日から 2026 年 3 月 31 日までの 1 年間分		提出年月日	2026 年 3 月 3 日	
研究課題	【ひろみら領域研究】 上場不動産会社の倒産に関する研究				
研 究 組 織	研究代表者及び研究分担者		役 割 分 担		
	氏 名	学部・職名			
	(研究代表者) 政岡 孝宏	商学部・教授	研究代表者		
	(研究分担者) 該当無し				
(代表者・分担者計 1 名)					
今 年 度 の 研 究 成 果 要 旨	※要旨の文字数は 600～800 字程度でお願いします。 本調査研究は、現行の倒産法制が出来上がった 2000 年 4 月以降に倒産した上場不動産会社 33 社を対象に、その倒産過程および財務的特徴を個別に事例分析することを目的としたものである。本調査研究を通じた最終的な研究課題は、不動産会社における倒産の予兆を示す財務指標の抽出を試みることにある。なお、本調査研究において不動産会社を対象としたのは、2000 年 4 月以降に倒産した非製造業の上場会社 127 社のうち、もっとも件数が多い業種が不動産業だからである。 本調査研究で対象とする 33 社は、その時代区分によって、(1) 不良債権処理の渦中にあった 2003 年から 2004 年 (2 社)、(2) サブプライム危機に瀕した 2008 年 3 月から 8 月までの 6 か月 (6 社)、(3) リーマンショックの直撃を受けた 2008 年 9 月から 2009 年 5 月までの 9 か月 (20 社)、(4) リーマンショック後の不動産不況下にあった 2010 年から 2011 年 (5 社) の 4 期に分けることができる。このうち、本調査研究を開始した 2025 年 4 月 1 日時点において、上記の区分のうち、第 1 期にあたる 2 社 (セザール、ジェネラスコーポレーション) および第 2 期にあたる 6 社 (レイコフ、スルガコーポレーション、キョーエイ産業、ゼファー、アーバンコーポレイション、創建ホームズ) について調査を終えており、その成果は『修道商学』第 65 巻 2 号および第 66 巻 1 号に掲載済みである。そのため、本調査研究では、第 3 期以降を対象として研究を進めてきた。そして、2008 年 9 月～10 月に倒産した 7 社 (Human21、リプラス、シーズクリエイト、ランドコム、エルクリエイト、ノエル、ダイナシティ) の研究成果を取りまとめたものとして、『修道商学』第 66 巻 2 号に投稿中である。 現時点では、まだ個別のケースについて調査を積み重ねている過程にあり結論を導出するには至っていない。倒産の予兆を示す財務指標については、33 社すべての調査結果が揃った段階で検討することとしたい。				
成 果 発 表 予 定	発 表 論 文 題 目	上場不動産会社の倒産事例 - 基礎資料 (3)			
	発表誌名 発表学会名	発行所 学会名	発表時期	備 考	
	修道商学第 66 巻 2 号	広島修道大学ひろしま未来協創センター	2026 年 2 月	pp.49-67	
※研究期間が 1 年未満の場合、本用紙を調査研究完了報告書と兼ねることができます。 (成果発表報告時 研究代表者使用欄) ※規程に則り、調査研究費による成果発表であること及び交付年度を明記すること ☒ 上記の通り成果発表を 行う → 行った (ひろしま未来協創センター使用欄) ☐ 成果発表資料を受け取った。(年 月 日)					

2025 年度 調査研究活動報告書

広島修道大学ひろしま未来協創センター長 殿

研究(代表)者所属 : 人文学部

研究(代表)者名 : 樋口和彦

下記のとおり今年度の調査研究費による調査研究が終了しましたので、ここに報告いたします。

当該研究期間	2025 年 5 月 30 日から 2026 年 3 月 31 日までの 1 年間分		提出年月日 2026 年 3 月 8 日	
研究課題	【ひろみら特別研究】 制度・組織と支援観の双方の視点に基づく就学前施設から学校への移行モデルの開発			
研究組織	研究代表者及び研究分担者		役 割 分 担	
	氏 名	学部・職名		
	(研究代表者) 樋口和彦	人文学部・教授	調査・データ収集	
	(研究分担者) 永田成文 (代表者・分担者計 2 名)	人文学部・教授	調査対象の教育委員会・学校等との連絡・調整	
今年度の研究成果要旨	※要旨の文字数は 600～800 字程度でお願いします。 『多様なエビデンスを融合した特別支援教育版架け橋プログラム作成に関する研究』の事前調査として、①国立国会図書館および国立特別支援教育総合研究所図書室での文献収集、②研究所研究員からの情報収集、③文科省研究指定の 3 自治体（横浜市・川崎市・北海道）における聞き取り調査を実施した。目的は、幼児期から小学校への接続に関する実践、特に健常児同士の接続プログラムの実態を把握することである。文献調査では自治体刊行物などを精査し、各地の先進的な取り組みを整理した。研究員への聞き取りでは、同種研究の理論的背景や実践的知見を収集した。また自治体調査では、横浜市の連携推進地区における実践、川崎市の「ときも学びのプロセス」、北海道の広域連携モデルについて詳細な調査を行った。本稿では特に北海道の事例に焦点を当てる。 北海道では、北海道幼児教育推進センターが全道の教育委員会に対して接続モデルを提示し、市町村の実情に応じたプログラム作成を支援していた。モデル地域であるえりも町では、幼少接続アドバイザーを配置し、幼保小合同研修を通して相互の子ども理解を促進していた。課題としては、幼児教育と小学校の子ども観の違い、さらに幼稚園と保育所の教育観や組織文化の差異が挙げられた。幼稚園は自由保育を基調とし研修文化が強い一方、保育所は計画的保育を重視する傾向がある。こうした違いを調整する過程で町内 3 保は統合され認定こども園となり、小学校とは生活科を軸とした合同授業が実施された。その結果、幼保小の垂直的連携と幼保間の水平的連携が制度的・実践的に確立された。 北海道の実践は、特別支援教育版の架け橋プログラム構築にも有益な示唆を与える。特別支援教育では認知発達、応用行動分析、構造化理論、ソーシャルスキルトレーニングなど異なる理論的立場が存在し、統合が困難である。北海道の事例は理論差を前提としつつ共通基盤を形成する調整プロセスのモデルとして参考になる。			
成果発表予定	発表論文題目	多様なエビデンスを融合した特別支援教育版架け橋プログラム作成のための予備調査		
	発表誌名 発表学会名	発行所 学会名	発表時期	備考
	日本発達障害学会 第 61 回大会	日本発達障害学会	2026 年(令和 8 年) 11 月 14 日—15 日	
※研究期間が 1 年未満の場合、本用紙を調査研究完了報告書と兼ねることができます。 (成果発表報告時 研究代表者使用欄) ※規程に則り、調査研究費による成果発表であること及び交付年度を明記すること ☒ 上記の通り成果発表を(行う)・行った (ひろしま未来協創センター使用欄) ☐ 成果発表資料を受け取った。(年 月 日)				

2025 年度 調査研究活動報告書

広島修道大学ひろしま未来協創センター長 殿

研究(代表)者所属 : 商学部

研究(代表)者名 : 松尾 洋治

下記のとおり今年度の調査研究費による調査研究が終了しましたので、ここに報告いたします。

当該研究期間	2025 年 4 月 1 日から 2026 年 3 月 31 日までの 1 年間分		提出年月日 2026 年 3 月 11 日	
研究課題	【ひろみら特別研究】 オルダーソン理論の再考：マイクロマーケティング研究領域の理論化に向けて			
研究 組 織	研究代表者及び研究分担者		役 割 分 担	
	氏 名	学部・職名		
	(研究代表者) 松尾 洋治	商学部・教授	研究の計画と遂行	
	(研究分担者)	学部・		
	(代表者・分担者計 1 名)			
今年度の研究成果要旨	※要旨の文字数は 600～800 字程度でお願いします。 本研究の全体構想は、第二次世界大戦後のアメリカにおいて最も影響力をもったマーケティング理論家の一人であるロー・オルダーソン（Wroe Alderson, 1898–1965）の主著『マーケティング行動と経営者行為』（以下、 <i>MBEA</i> ）の学説史的位置づけを再検討し、同書を戦後に開花したマイクロマーケティング論、すなわちマーケティング管理論の源流として位置づけ直すことを目的としている。 従来、 <i>MBEA</i> は流通論や商業論を中心とするマクロマーケティング論の書として理解されることが通例であった。しかし近年、とくに 2000 年代以降のオルダーソン再評価の動向のなかで、彼の理論的関心は流通プロセスや流通制度一般の分析ではなく、むしろ個別企業の市場行動やマーケティング行為を管理する経営者の行為原理の導出、すなわち管理論（行為論）の構築に向けられていたのではないかと、という新たな解釈が提示されつつある。このようなマイクロマーケティング論的視点からの理解は、従来の通説に対して学説史的再検討を迫るものであり、オルダーソン理論をめぐる解釈は、現在、大きな転換点を迎えつつある。 本研究は、この新たな研究動向に倣すと同時に、なお十分に解明されていないいくつかの課題の解決を試みるものである。第一に、オルダーソンがなぜ管理論、とりわけ経営者の意思決定に資する理論構築へと関心を向けるに至ったのかという、 <i>MBEA</i> の執筆意図および同書の成立背景が十分に明らかにされていない点である。第二に、 <i>MBEA</i> のどの箇所をどのように読解すれば、それをマネジリアル・マーケティングの著作として位置づけることができるのかについて、これまで精緻なテキスト分析が十分に行われてこなかった点である。 以上の問題意識に基づき、本年度は第一の課題に重点を置き、 <i>MBEA</i> の成立背景を歴史的に検討した。具体的には、オルダーソンが当時、経営コンサルタントとして実務に従事していた点に着目し、プラグマティックな観点から企業向けの管理論の提示を志向していたことを指摘した。その上で、理論構築のための方法論として機能主義が採用され、学際主義的な観点から理論が体系化されていく同書の成立過程を、状況分析を通じて明らかにした。これにより、 <i>MBEA</i> はマーケティング管理論として構想された著作であることを示すことができたと考える。			
成果 発 表 予 定	発 表 論 文 題 目	オルダーソン理論の成立背景—方法論・理論・実践の三項関係から—		
	発表誌名 発表学会名	発行所 学会名	発表時期	備 考
	・『マーケティング史研究』第 5 巻第 3 号	マーケティング史学会	2026 年 9 月（予定）	2026 年 3 月末 に投稿予定。
※研究期間が 1 年未満の場合、本用紙を調査研究完了報告書と兼ねることができます。 （成果発表報告時 研究代表者使用欄）※規程に則り、調査研究費による成果発表であること及び交付年度を明記すること ☐ 上記の通り成果発表を 行う ・ 行った （ひろしま未来協創センター使用欄） ☐ 成果発表資料を受け取った。（ 年 月 日）				

2025 年度 調査研究活動報告書

広島修道大学ひろしま未来協創センター長 殿

研究(代表)者所属 : 経済科学部現代経済学科

研究(代表)者名 : 劉 亜静

下記のとおり今年度の調査研究費による調査研究が終了しましたので、ここに報告いたします。

当該研究期間	2025 4 月 1 日から 2026 年 3 月 31 日までの 1 年間分		提出年月日 2026 年 3 月 9 日	
研究課題	中小企業向け信用スコアリングモデル：ビッグデータと AI を活用した金融革新			
研究組織	研究代表者及び研究分担者		役 割 分 担	
	氏 名	学部・職名		
	(研究代表者) 劉 亜静 (代表者・分担者計 1 名)	経済科学部現代経済学科 教授	研究代表者	
今年度の研究成果要旨	※要旨の文字数は 600～800 字程度でお願いします。 本研究は、ビッグデータおよび人工知能を活用した信用スコアリングモデルが、中小企業金融にどのような変化をもたらしているのかを、日中比較の視点から検証することを目的としています。 従来、中小企業向け融資は、財務諸表や担保情報に依存した審査が中心でした。しかし、情報の非対称性や審査コストの問題から、十分な信用情報を持たない企業は資金調達が難しいという課題が存在していました。 近年、中国ではデジタル経済の急速な発展を背景に、オンライン金融プラットフォームを通じたデータ駆動型融資が拡大しています。EC 取引データや税務データなどの多様な情報を AI モデルに組み込み、動的かつ包括的な信用評価を行う仕組みが構築されています。これにより、従来金融アクセスが限定されていた小規模企業にも資金供給が広がっています。一方、日本では 2000 年代以降スコアリング融資が導入されましたが、現在でもリレーションシップバンキングが中心であり、信用スコアリングは補完的役割を果たしています。ハード情報とソフト情報を組み合わせた慎重な運用が、日本の特徴といえます。 本研究では、制度分析に加え、日本および中国の金融実務家へのインタビューを実施し、両国の信用供与モデルを比較しました。その結果、中国はプラットフォーム主導型、日本はリレバンのような基盤型という異なる発展経路を辿っていることが明らかになりました。 本研究の意義は、信用スコアリングの高度化が中小企業金融に与える経済的効果を整理し、日本におけるデータ活用型金融の今後の方向性について示唆を提示する点にあります。			
成果発表予定	発表論文題目	中小企業向け信用スコアリングモデル：ビッグデータと AI を活用した金融革新		
	発表誌名 発表学会名	発行所 学会名	発表時期	備考
	一般社団法人 大阪銀行協会 大銀協フォーラム 研究助成論文集 第 30 号, 2026 年 2 月	一般社団法人 大阪銀行協会 大銀協フォーラム	2026 年 2 月	pp.00－00
※研究期間が 1 年未満の場合、本用紙を調査研究完了報告書と兼ねることができます。 (成果発表報告時 研究代表者使用欄) ※規程に則り、調査研究費による成果発表であること及び交付年度を明記すること ☒ 上記の通り成果発表を行った (ひろしま未来協創センター使用欄) ☐ 成果発表資料を受け取った。(年 月 日)				

2025 年度 調査研究活動報告書

広島修道大学ひろしま未来協創センター長 殿

研究(代表)者所属： 人間環境学部

研究(代表)者名： 三本木至宏

下記のとおり今年度の調査研究費による調査研究が終了しましたので、ここに報告いたします。

当該研究期間	2025 年 10 月 1 日から 2026 年 3 月 31 日までの 0.5 年間分		提出年月日 2026 年 3 月 5 日	
研究課題	【ひろみら特別研究】 好エタノール性微生物に学ぶ蛋白質安定化の構造要因			
研究 組 織	研究代表者及び研究分担者		役 割 分 担	
	氏 名	学部・職名		
	(研究代表者) 三本木至宏	人間環境学部・教授	研究統括、好エタノール性火落菌由来蛋白質の調査	
	(研究分担者) なし			
(代表者・分担者計 1 名)				
今 年 度 の 研 究 成 果 要 旨	※要旨の文字数は 600～800 字程度でお願いします。 本調査研究では、日本酒腐敗の原因となる火落菌がどのようにして高エタノール濃度下を好んで生育できるのか、その謎を遺伝子および蛋白質レベルで解明することを目的に、下記の成果を上げることができた。 ① ゲノムシーケンスを通じた系統解析および調査対象とする遺伝子の解析 好エタノール性火落菌 <i>Lactobacillus acetotolerans</i> S-35 株について、当研究室で実施した全ゲノムシーケンスの結果を元に、2 種の乳酸デヒドロゲナーゼ (LDH) 遺伝子がゲノム中にコードされ、エタノール存在下で本菌が生育する際にその遺伝子発現が制御されていることを見いだした。2 種 LDH が外部環境のエタノールに応答して代謝に関わっていると考え、そのエタノールに依存した酵素活性、および構造安定を解明するため、②の実験研究に着手した。 ② LDH 遺伝子のクローニングと大腸菌による異種発現解析 <i>L. acetotolerans</i> S-35 株由来の 2 種 LDH 遺伝子を合成し、大腸菌用タンパク質発現ベクター pKK223-3 へクローニングした。本プラスミドで大腸菌 JCB387 を形質転換することに成功している。 以上の成果は、火落菌のエタノール環境への適応戦略に関する基礎的知見を提供する。この成果を土台に、2027 年度科研費・基盤研究 A に「極限環境微生物学の統括的理解に関する研究 (仮題)」として、代表者がこれまで取り組んできた熱や塩に対する蛋白質の安定化機構に関する知見と併せて申請する予定である。			
成 果 発 表 予 定	発 表 論 文 題 目			
	発表誌名 発表学会名		発行所 学会名	発表時期 備 考
	日本農芸化学会中四国支部第 75 回講演会		日本農芸化学会中四国支部	2026 年 9 月 口頭発表予定
※研究期間が 1 年未満の場合、本用紙を調査研究完了報告書と兼ねることができます。 (成果発表報告時 研究代表者使用欄) ※規程に則り、調査研究費による成果発表であること及び交付年度を明記すること ☒ 上記の通り成果発表を 行う (ひろしま未来協創センター使用欄) ☐ 成果発表資料を受け取った。(年 月 日)				